

自分史（青木ハル）

作成日：令和 3 年 3 月

大正 15 年、東京都で生まれた。

兄姉は父の任地で生まれたのでそれぞれの誕生地は異なり、東京で生まれたのは私だけである。

東京では 2-3 回引っ越しをした記憶があるが、5-6 歳の頃は荏原の戸越公園駅の近くの蛇窪に住んでいた。近くに小川が流れ、大井町線の線路までずっと野原で何もなかった。当時から内風呂があったのでお風呂さんに行った記憶がない。

その自宅前に大工が住んでいて、東京都荏原郡本村字諏訪分に新築をお願いし、母が家紋入りの法被を何枚か縫って新築のお祝いをした。

昭和 7 年、転居前の荏原郡上神明町の宮前尋常小学校に入学した。転居してから東京府荏原郡本村字諏訪分の住所は昭和 7 年 10 月 1 日付けで東京市世田谷区東玉川 105 番地となった。

東玉川は今でこそ住宅街になっているが、当時は水田、畑、林、田園しかなく、白鷺が舞い、夜は河鹿（かじか）や梟（ふくろう）が鳴き、夏は蛍が乱舞するような環境だった。家の前は今は無き桜並木でとても綺麗だった。窓からは富士山が見え、夏になると多摩川の丸子橋から三尺玉の花火がきれいに見えた。秋のお月見の頃に縁側に飾ったお飾りやお団子などを近所の男の子たちが盗みに入るのも懐かしい思い出だ。その頃はお団子をこっそり持っていくのが一種の恒例行事のようにになっていた。

近くの農家の方が大きな籠一杯にトマトや胡瓜、白瓜などを持ってきてくれ、とてもおいしかった。トマトは鮮やかな赤でとても甘かった。トマトの種はきちんと取っておき、農家の方に返却した。それが来年のトマトになったのだと思う。

当時、タクシーはまだ珍しかったが、何度か日本橋の三越までタクシーで行ったのを覚えている。当時のタクシーは運転席の後ろに折り畳み式の座席があり、それを払げて家族向かい合わせで座った。当時の中原街道は砂利の一本道で細かった。運転手さんとの交渉で値段は決まるのだが、東玉川から日本橋まで 50 銭くらいだった。ハガキが 2 枚で 3 銭だったので、今のお金に換算すると 2000 円くらいだろうか。そう考えると安かった。

日本橋に行ったのは三越に行くためだ。毎年、三越から父親の実家にお歳暮やお中元を贈っていた。リンゴの箱に食べ物や子供用のお菓子、おもちゃなどをたくさん入れて送っていた。おそらく、当時、三越は日本橋にしかなく、地方の人は三越から品物が届くととても喜んでくれた。父の実家にはこうやって毎年贈り物をしていたが、母の実家には母が遠慮していたから一回も送ったことがなかった。今から思うと旦那さんを立てるよくできた奥さんだったと思う。三越では食堂でお昼を食べるのがとても楽しみだった。父がおいしそうにジョッキでビールを飲んでいたので覚えている。

母親の思い出も沢山ある。三姉妹の洋服や浴衣は母が手作りで着せてくれた。冬はお揃いのセーターを大晦日の夜までかかって編んでくれ、お正月の晴れ着にしてくれた。

食事は何でも手作りで（父は宴会が嫌いでいつも決まった時間に帰宅していた）一度も店屋物を食べたことがなかった。友達の外食の話を聞くと羨ましいと思っていたが、女学校の高学年の時は鶏を一羽捌き、正月の御節料理を一人で作ることができた。母の毎日の食事の支度を見ていたお陰だと思う。

お客様がみえると、一品ずつ御節料理を作り、小学生の私が客間へ運び（子供はお客様の時以外は客間への出入りは禁止されていた）、お皿が空くころまた次の料理を出して母は台所から一歩も出ずに料理を作っていた。お客様は、料理がとてもおいしいのでまたお邪魔します、と言って喜んでくれた。

東玉川に越してから世田谷区の八幡小学校に転校した。その後すぐに奥沢に分校ができたので、当時低学年だった私と下の姉はその奥沢尋常小学校に移った。その頃、大岡山に相撲びいきのお金持ちの方がいて、その方が奥沢小学校に力士を呼んでくれた。前頭くらいの力士だったが、3人来てくれ、全校生徒と一緒に相撲体操をした。

昭和12年、小学校を卒業し、公立の高等女学校に入学した。姉二人は私立だったが、上の姉が「あなたは公立の方がいい」と言って公立に通うことにした。私立は校則や決まりが厳しかったので、公立の方が楽しいと思って、姉はそう言ってくれたのだと思う。

加藤先生という校長先生がとてもいい方で、よく教室の外の石段に腰を掛け、校庭でバレーボールやバスケットボールをしている生徒たちに出来の良い悪いといった分け隔てなく、声をかけてくれた。その校長先生は夏の槍ヶ岳の登山では、山頂で自分のリュックサックから胡瓜を出して生徒に配り、皆を喜ばせてくれた。

夏は千葉の臨海学校に行ったが、搾りたての牛乳が生ぬるくて飲めなかったのを覚えている。その他、日吉まで徒歩で往復する行事もあった。今の駒沢公園のあたりまで行って帰ってくる行事もあった。当時のその辺りにはもちろん国立病院もなく、すすきの生える野原で家がぽつぽつとある程度だった。今の目黒区役所は昔はアメリカンスクールでその生徒であるアメリカ人とスポーツの交流試合をしたこともある。また、東京市の全公立高校の男女が神宮外苑に集まり、運動会を行ったのも覚えている。今の国立競技場のあたりに競技場があったのだと思う。当時は東横線が通っていたので東横線に乗っていった。

昭和16年、父が病に倒れた。新潟の山奥の関温泉という温泉に両親と私と3人で行った。そこはいわゆる湯治宿（とうじやど）という温泉療法の旅館だった。十能（じゅうのう）で各部屋に炭を運んでもらい自炊をする人もいたが私たちは3食を宿の人に作ってもらっていたように思う。父の具合がいい時は下の姉を連れて宿で作ってくれた大きなおにぎりを持って、赤倉から野尻湖まで笹に足を取られ藪をかき分けながらハイキングをした。よく歩けたなあと思うほど険しい道だった。

その後父は全快し帰京した。父が亡くなった後も母や姉たちと一緒に夏の度にその宿に行った。宿の主人が車で色々なところを案内してくれ、上越の観光地の殆どは連れて行って

もらったと思う。この宿とは先々代から現在まで家族のような付き合いをしている。

そして、昭和 16 年に大東亜戦争が始まる。しかし、この頃は戦争が始まったといっても長閑なものだった。ある日、女学校の校庭の上空に米軍機が一機飛んできて、みんなで皇居は平気かしら、と話したのを覚えている。

昭和 17 年、敵国語である英語を使うことが禁止され始めた。しかし、当時私は 5 年生だったが、5 年生だけは英語を勉強し続けることができた。5 年生の時に一度だけ軍需工場に勤労奉仕に一週間行った。その工場では、何に使うのかは分からないが、電線の周りに糸を網のように張っていくものを作っていた。私たちの仕事はその機械がきちんと動いているかどうかをチェックするものだった。

昭和 18 年、女学校を卒業。卒業式で東京市長、たしか陸軍大尉だったと思う、が「お前たちはよいおっかさんになれ！」と言ったのを覚えている。その年、ドレスメーカー女学院に入学する。同年 7 月、東京市から東京都世田谷区東玉川 1 丁目 15 番 5 号に住所が変更になった。

昭和 19 年、立会川にあった海軍の衣料所に東京の各洋裁学校の生徒が集められて軍服、帽子、白衣などを作ることになった。朝の 8 時から夕方 5 時までみっちり仕事をしなければならず、朝も早いのでとても疲れた。ミシンやアイロンが何百台も並んでおり、生徒達が一斉に仕事をしている、少しでもさぼると係員が「おい、ぼやぼやするな！」と怒鳴る。本当に重労働で息も付けないほどだった。

その頃、自宅でも防空壕を掘った。4 畳ほどの大きさだった。上の姉は結婚していたので、その防空壕は両親と下の姉と私の 4 人で入るものだった。夜は家中の戸を開けて服のまま寝て、空襲警報と共に防空壕に入るという生活だった。警報には警戒警報と空襲警報があり、空襲警報は「ウーン」という長い音の警報だった。初めの頃は警戒警報も鳴っていたが、そのうちに全て空襲警報になった。不思議なものであれだけ空襲が来ると恐怖心が全くなくなる。空襲警報の最中に防空壕を出て米軍機を見ていた。B29 は南から富士山を目印に北上し、富士山で東に曲がって東京方面にやってくる。その時にちょうど家の上を通過するのだが、操縦士の顔が見えるくらい低空飛行で飛んでいた。それでも怖さは感じなかった。不思議なものだ。

焼夷弾もずいぶん落とされたが、自宅近くはなぜか免れた。奥沢の駅の方は焼けた。焼夷弾が米軍機から落とされる瞬間も見た。初めは大きいのが一つ落ちてきてそれが空中で小さい焼夷弾に分割される。地上に落ちると同時に真っ赤な火の手が上がり、次に黒い煙が襲ってくる。目が開けられない位だった。

新宿と渋谷の空襲の時も酷かった。北の空が真っ赤になり、そこに日本機と思われる飛行機が数機、小さな鳥が飛んでいるように飛んでいた。まるで絵を見ているようだった。唖然と見ているしかなかった。

上の姉は結婚して飯田橋に住んでいたが、その周辺は地下水が出るので防空壕を掘ることができなかった。その代わりに燃えないとされるトタンのようなもので小屋を作ってそ

こに隠れていた。大空襲の翌日、姉が心配で見に行ったが、そこも焼け野原だった。神田の駅から赤坂方面は小さな鉄筋コンクリートの建物を除いて全て焼けた。反対側も墨田川まで同じ状態、正に焼け野原だった。

昭和 20 年、作業所に生徒全員が集められ、学校が閉鎖されたので、全員この工場働くように指示された。しかし、私は、兄が大崎の三共製薬で軍関係の特別な製品を作っていたので召集されなかったのも、下の姉と共に終戦までその事務所で働いた。

上の姉は兄の会社である三共製薬の同僚と結婚していた。後にその義兄は徴兵され、硫黄島で亡くなった。姉に送ってきたハガキに「化学記号で S と書く島にいます」と書いてあったので「硫黄島にいるのだな」と思った。硫黄島で全員が玉砕したというニュースを聞いたときは下の姉と二人で会社の屋上に登り、黙とうした。親しい人で亡くなった人はこの義兄だけだった。弔いのため、終戦後は靖国神社に行き参拝した。

昭和 21 年、終戦後 4 月から閉鎖されていたドレスメーカー女学院の授業も始まるようになった。しかし、校舎は焼け落ちていたので唯一焼け残った寮の 6 畳間 2 部屋を壁を抜いて一部屋にして教室にした。12 畳に 20 人の生徒が入ったのでとても狭かった。

昭和 22 年、ドレスメーカー女学院を卒業。卒業後は先生の紹介で有楽町にあった大阪ホテルの洋裁店で勤めることになった。このホテルは米軍女性の宿舎となっていたが、一部の女性のマナーの悪さには驚いた。テキサス出身のマナーの悪い女性が、PX（今の服部時計店が PX という米軍用のデパートになっていた）で買ってきた安い生地を持ってきて服を作れと指示してくる。当時 1 ドルは 360 円だったが、6 ドルで 1 着が相場だった。しかし、その女性は 6 ドルで 2 着作れと言ってくるので断ると、「テキサスなら 6 ドルで 2 着よ。敗戦国の女のくせに」と言われた。中にはクッキーをくれるような優しい米国人女性もいた。

そうこうしているうちに、2000 人以上の入学希望者があったドレスメーカー女学院の先生から当校の教師にならないか、というお誘いがあった。卒業生たちはそれぞれの就職先で働いていたが、私のように我慢強く長く働く人は少なかったらしい。そこから私の教職としての生活が始まる。終戦後、男子学生が入学したためドレスメーカー学院と名称を変更し大学と短期大学が併設された。

父は終戦と同時に離職し、上の姉も家に戻ってきていたので、私は家族 5 人の生計を担うことになった。兄夫婦が中国から帰国し、しばらく家にいたが、職も探さずにいたのでよく父に叱られていた。小田原や防府などに転居して塩作りをしたりしていたがうまくいかず、私は兄夫婦の家計も援助した。

父は昭和 27 年、母は昭和 46 年、上の姉は平成 13 年、下の姉は令和 2 年に亡くなった。それぞれの葬儀、父の 50 回忌も終え、今はほっとしている。

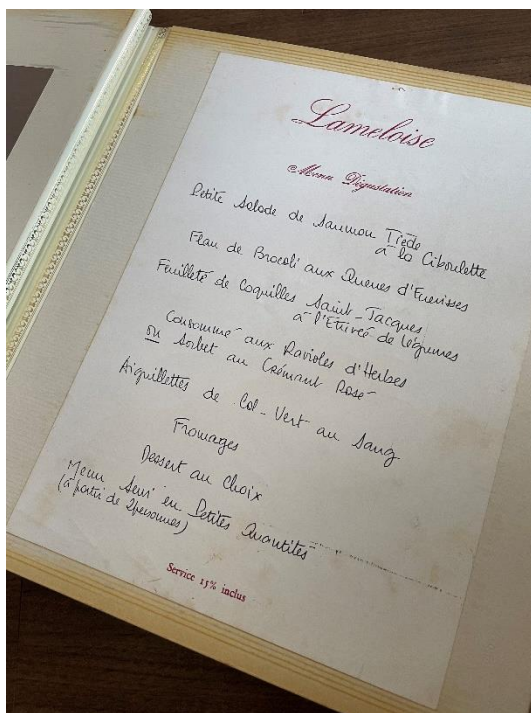
余談ではあるが、私は女学校時代から勉強よりも体を動かすことの方が好きだった。女学校の時は、軟式テニス、バスケットボール、9 人制バレーボール、水泳、弓道をし、30 歳

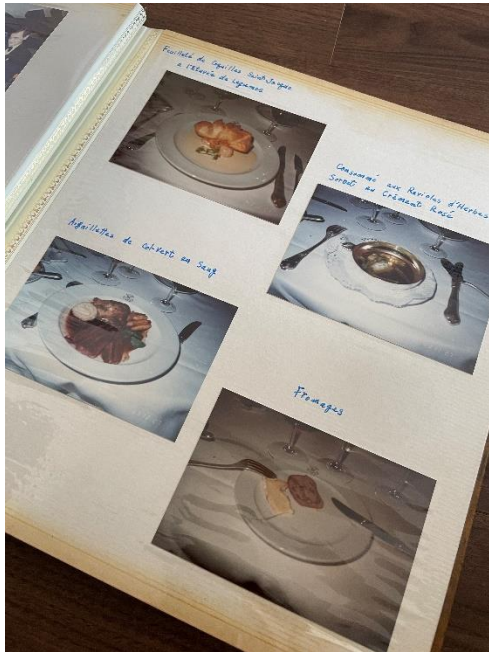
を過ぎてからはスキーを始めた。家に先生を招いてお花とお茶を習い、着物が好きだったので訪問着、小紋、色留袖などを染めて帯など色々作った。三味線（長唄）や革染めもずいぶんやったし、今はコロナで中断しているが、退職後は日本画、書、版画にも取り組んだ。写真と旅行も好きで、観光客がいない 8 月末頃の京都奈良には仏像の写真を撮りによく行った。

旅行が好きで国内・海外に行ったが印象に残っているのは海外旅行だ。初めは団体旅行で行っていたが、その後は個人でも行くようになった。退職後は下の姉をよく国内外に連れて行ってあげた。

女学校時代の友人のご主人が新聞協会のヨーロッパ総局長としてパリに赴任し、16 区という高級住宅街に住んでいたので毎年 2 週間くらい遊びに行っていた。一人でパリの街をブラブラと散歩したり、写真を撮るのが好きだったので写真を撮って楽しんだり、運転好きのご主人に連れられて観光客のいない街や郊外に遠出したり、地元の人しかいないようなレストランに連れて行ってもらったりした。特に大晦日のノートルダム寺院のミサは素晴らしかった。年が明けると皆が「ボナネ（「めでたい年」という意味）」「ボナネ」と言いながら知らない人通しでも抱き合ってお祝いをするのですが、印象に残る楽しかった思い出だ。ノートルダム寺院が焼失したのは残念である。







その友人が心臓発作で急死した。「主人を頼む」と言われていたので、子供の時から知っている 2 人の息子さんを含め、食事会に参加したり、温泉にお招きしたりしたが、そのご主人も亡くなってしまった。2 人の息子は私のことを母親の様に思ってくれ、今はそのお嫁さんともお付き合いがある。お嫁さんはお茶をやっているそうなので、東玉川の家を引っ越す際には、私の着物類や革染め草履、バッグ、アクセサリー、下の姉が作った組み紐などをあげる事が出来た。その他、洋服、宝石類、アクセサリーなど皆様に使っていただき又庭の植物、水琴窟などお好きな方々に差し上げ、永年住んだ家の思い出を皆様が引き継いでくださったことを感謝している。

戦後からは東玉川のご近所は古い家も建て替えられ、庭のないお宅ばかりになりました。引っ越しの際、ご近所の方からは「まるで自分の家の庭の様に思っていたので、このお庭が無くなるのはとても残念で悲しい」とおっしゃっていただき、改めて庭を見てみると自宅はまるで森か林のようだった、と思い出した。

家の思い出も記しておきたい。

自宅は総檜で平屋だが大黒柱（地方の民家の様な太い柱ではないが）は二階建ての長さで天井が高く、入母屋造りで瓦も三州瓦で大きかった。昭和 50 年頃の葺き替えの際は普通の職人ではこの大きく重い瓦と急勾配の屋根は無理、と言われた。台風でも大雨でも一度も手入れしないままであった。

小学生の頃、新築の自宅の檜の廊下はおからを木綿の布に包んで拭き、その後乾拭き、長押（なげし）、柱は豆乳に浸した布を固く絞って拭き、紫檀（したん）の机は胡桃（くるみ）を割って中の実を金槌で叩いて駒まくし、それを布で包んで拭いた。これが子供の仕事だっ

た。

家は坂道にあったので裏門からは直ぐに家に入り、表門からは玄関までが坂だったので縁側は大人の腰の高さになっていた。井戸は表門の中の築山の下に掘ってあり、裏の台所までパイプで水を引き、台所の流し台の横に子供の背丈よりも大きいポンプがあり炊事に使った。五右衛門風呂だったお風呂は子供がポンプを漕ぎ水を入れ風呂の上のタンクに水を溜めておく決まりだった。風呂焚きは台所の揚げ板を上げて大人の首から下位までの高さの地下の石段を下り、石炭で焚いた。

庭は門構えの松の他に榿、繭（もち）、槿、梅、桜、南天、躑躅（つつじ）、梔子（くちなし）、山茶花（さざんか）、椿、紫陽花、その他いろいろ。裏庭には柿、梨、桃、栗、雪柳、桜桃（ゆすらうめ）、竜舌蘭（りゅうぜつらん）、芭蕉などの花々が植えてあった。父の田舎では、裏庭に花桐（かりん）「お金を借りない」、榿（かし）「お金を貸す」を植え、表庭に繭（もち）「金持ち」を植えるという風習があったそうだ。家には花桐（かりん）はなかったが、榿（かし）と繭（もち）が植えてあり、家を処分する年に初めて繭（もち）の木に赤い小さい実が一杯付いて名残りを惜しんでくれたように思う。



（表門）



（裏口）

ドレスメーカー学院で教職の座に就いていた頃は、労働省や文部省が実施する服飾関係の国家試験にも加わり、法務省が管轄する受刑者作成の作品の審査も行った。色々な業界の方と交流することができ、今までは全く知らなかった知識や考え方を学べたものも良かったと思う。

下の姉が亡くなり、家族がいなくなったけど、今の家に落ち着く事が出来てよかった。弁護士先生、ケアマネジャーや介護の関係の方など、身内のように気遣っていただく方に知れ合えたことに有難く感謝している。

なんで戦争に反対しなかったのか、という若い人がある。しかし、そういう人に知っても

raitai. 今の社会主義の国よりももっと厳しく、国民一丸となるようにと何年も洗脳することで教育をし、何も教えてくれなかった時代が日本にもあったのだということ。今の90歳以上の人はそういう環境で育っている。若い人たちは何かを主張する前に何が大切なのか、何が必要なのか、を考えてほしい。

親を大切にし、親を含めた他人への言葉遣いを大切にして欲しい。人は何か一つは必ず良い所を持っている。それを誉めてあげることでその人は変わる。そう思って人と接してほしい。ほんの一つの思いやり、ほんの一つの言葉遣い、ほんの一つの考え事、これがとても大切だと思う。

